本田義英君の批評に就きて

橘　惠勝

先人の足跡を印せざる原野にさゝやかな道を開くといふこともなか〳〵大抵な苦心ではないのである、然るに自然の風景をそのまゝに損せざるように保存して後進の人に多趣なるながめを迚らしむるといふ親切にもまた並々ならぬ用意がいるのである、拙著の佛教心理の研究は自から完全無缺である現代的權威を確立したと揚言するものではない、現代的に佛教の權威を確立せんことを理想として小さき試みを學界に貢獻したるに過ぎない、後の研究者の手引として公にしたのに過ぎないのである、拙著に古典的事實に依て確證せんことを期圖し(序文)古典の說明によつて記載すること(本文四八)を明言してある、引文又引文はそれがためであつて私に說述することならば作業は易々たることであり讀者を勞することも少くなきことであるがこの點は拙著の學界のために忠ならんとして大に苦心したることである、わが計畫が空しくなつたかどうだかそれは讀者の學力の程度問題であるから著者の責任ではないから如何でもよいがわれは古典をして語らしめんがために一系の組織に苦心したのである。

本田君は佛教心理上の語義の如き少しも咀嚼の跡がないと酷評してゐるが輓近の心理學に比較し得べきことは知覺の上の情調に由て三受の生ずるといふが如き純粹思考の過程なるが故に別境といふが如きことにまで說明してある、眞面目に更らに强目して一讀して酷評せんがために酷評せられんことを願ふ、たとひ血が出ることがありとても學界のためであるから自から犧牲となることを意とせない。

聞き捨てにならぬことは「引文の前後文脈の上に何等の組織統一なく時には殆ど無關係なる引文さへ加はりそれがために全卷の不首尾を來して居る」と本田君はいふてゐるがこれを換言すれば支離滅裂であるといふことであろうが願はくば具體的に指摘して其の致命的缺點を示されたい、わが著書に如是の放言をなし得る本田君に未だ一面識をも得ざるはまことに遺憾である。

わが眞面目なる佛教心理の研究は古人をして語らしむることが主旨であつて自己の粗笨なる臆說を發表せんがために公にしたものでないといふことを再言せなければなるまい。